第 3 章
若者たちと選挙：締めつけと取り込みのはざまで

新谷春乃

カンボジアでは，1990 年代のベビーブーム世代が有権者の年齢に達する中で，若者層は人口比的にも拡大傾向にあり，若者層の支持をいかに集めるかが選挙の重要な鍵となっている。ソーシャル・メディアがカンボジア社会に浸透する中，2013 年の国民議会選挙ではその場を利用して若年層らは野党支持を公言し，救国党の躍進を支えた（山田 2013）。このため，政権与党である人民党にとって体制維持の観点から若者層は無視できない存在となっている。2013 年の選挙以来，若者はいかなる政治経済状況下に置かれてきたのか，また人民党はいかなる取り込み政策を行ってきたのか。

経済発展の恩恵のかげで締めつけられる政治的自由

2013 年以降の若年層を取り巻く経済状況は，特に都市部では外国からの直接投資の増加による就業機会の拡大，最低賃金の上昇等によって改善してきた。その一方で，若者層は当局から監視対象としてその活動を注視されてきた。

2015 年 8 月の民衆の力による政権交代を求める「色の革命」をうったえた学生が逮捕されたことを皮切りに，同年末にはフン・セン首相が自身のフェイスブックでフェイスブックユーザーへの「監視宣言」を行った。その後，フン・セン首相をフェイスブック上で批判したとして逮捕される事案も発生した。2018 年 1 月には国王に対する侮辱を罪に問う法案が成立した。これはフン・セン政権批判がシハモニ国王批判と結びつけて行われる傾向と関連しており，同法案成立後にフェイスブック上で批判したとして逮捕される事案が複数件見られた。野党支持を公言し，自由な政治発言が可能であったソーシャル・メディアという場は，フン・セン首相による監視強化の中で，用心して利用しなければいけない場となった。

大学内での政治活動も制限されるようになった。「色の革命」提唱で大学生が逮捕された同月，ハンチュン・ナルーン教育相は大学構内での政治活動を禁じる通達を出した。大学構内の政治活動といえばフン・セン首相の妻ブン・ラニーが総裁を務める赤十字組織と三男のフン・マニーが代表を務めるカンボジア青年連盟（Union of Youth Federation of Cambodia，以下青年連盟）が主流であり，一見これらの活動に制限がかけられたように見える。しかしそれ以上に重要なことは，教員や学生による自由な政治議論を困難にした点であり，同時に人民党は特に救国党の活動家と大学生との接触を警戒してきた。

人民党による若年層の取り込み戦略

このような経済的恩恵と締めつけの中にいる若者層に対して，人民党は様々な取り込み戦略を打ち出してきた。2013 年の選挙で救国党を支持する動きが拡がった工場労働者に対

しては，最低賃金を年々増加させてきた。工場労働者には女性が多く，妊娠した労働者に対する雇用の保護や給付金の受給などの政策も打ち出し，支持をうったえてきた。フン・セン首相は 2017 年 8 月以降，49 回の工場視察で 70 万人の労働者に対して計 350 万米ドルを配ってきたと報じられている [1]。その視察動画では「人民党に投票するように」と繰り返しうったえる様子が映し出された。

人民党の青年組織を前身とする青年連盟は，若者の取り込みを強化してきた。アンコール・ソンクラーンを主催し，選挙監視活動やボランティア活動に従事してきた。アンコール・ソンクラーンは，4 月のクメール正月の際に催される祭典で，2013 年よりシェムリアップのアンコール遺跡群で開催されるようになり，近年では全国の州都でも開催されている。協賛企業も多く，カンボジアで実施されるイベントの中では最大規模でギネス新記録への挑戦を行うなど国際的な注目を集めようとしている。また青年連盟の活動に参加することで物品の供与を受け，留学の機会を得ることが可能だという。熱心に活動に参加することで活動証明書を得ることができ，それは特に省庁への就職や昇進に有利といわれている。活動に参加することへのメリットは多く，熱心な活動員となる学生もいる。

記憶の政治

人民党は記憶の政治も積極的に展開している。内戦・虐殺の時代を直接知らない若い世代が有権者の大半を占めるようになる中で，特に人民党にとって現代史をめぐる記憶の重要性が高まっている。なぜなら人民党が支配の正当性をうったえる上でクメール・ルージュからカンボジアを解放したという点が非常に重要であるためだ。クメール・ルージュ時代がいかに悲惨な時代で，そこからカンボジアをいかに解放し平和を築いたかという人民党の功績は国民の間で共有されるべき記憶である。そのため教育現場でも現代史教育に力が入れられている。国定歴史教科書作成にはハンチュン・ナルーン教育相が執筆委員会に参加し，内容を逐次確認する体制が作られており，どのような現代史を教えるか，人民党のコントロール下に置かれている。

記念日制定や記念碑制作も進められている。2018 年から 5 月 20 日はクメール・ルージュ時代を「記憶する日」として国民の祝日となった。同日は 1980 年代にはクメール・ルージュを「嫌悪する日」と呼ばれていたが，1990 年代に入りクメール・ルージュに対する投降・和解戦略を政府が打ち出す中で国民の祝日から外れていた。ただし，通称キリング・フィールドと呼ばれるプノンペン近郊のチューン・アエックでは毎年 5 月 20 日にクメール・ルージュ時代の虐殺を追悼する式典が行われており，その式典の中で人民党がクメール・ルージュからカンボジアを救ったという演劇が行われてきた。クメール・ルージュ時代の虐殺と，それを打倒した人民党の功績を記憶する日を国民の祝日とする一方で，内戦を終結させ平和を築いたという人民党の功績もまた記憶化する動きが加速している。2018 年は人民党にとって「内戦終結」から 20 周年の節目の年である。この「内戦終結」は 1991 年のパリ和平ではなく，1998 年末にクメール・ルージュ派最高幹部の 2 人ヌオ

ン・チアとキュー・サンパンが政府に投降したことを指している。それを記念する「ウィン・ウィン記念碑」が 2018 年 10 月現在国道 5 号線からプレック・ポー橋を渡った付近に建設中であった（写真）。2018 年 12 月 29 日には内戦 20 周年を記念した大規模式典が開催された。「ウィン・ウィン」はフン・セン首相がクメール・ルージュ派との投降戦略中に掲げた考え方で，「流血もなく敗者もいない」政治を目指したものである。「ウィン・ウィン政治」と呼ばれ，現在でもフン・セン首相の政治思想の要として度々言及されている。同記念碑はリンガを彷彿とさせる巨大な尖塔の周辺を壁画が覆ったデザインで，その壁画の主役はフン・セン首相である。フン・セン首相の英雄化を目的としていることは明らかで，さながらその政治人生の絵巻物の様相を呈している。また 2018 年はカンプチア救国民族統一戦線結成から 40 周年の節目の年でもあり，青年連盟は戦線結成 40 周年を記念するため，フン・センを歴史的英雄と位置づけ，その足跡を追う「歴史を知る 40km ウォーク」を主催し，若年層の参加を促した。フン・セン首相の英雄化が着々と進められている。

写真：建設中のウィン・ウィン記念碑

（出所）2018 年 10 月 29 日著者撮影。

静かな選挙

人民党による様々な取り込み戦略や記憶の政治が展開される中，2018 年の選挙を印象付けたのは「静けさ」であった。2013 年の選挙時は人民党と救国党のキャンペーンに参加する多数の若者が印象的であったが，2018 年の選挙ではそのような若者の勢いは見られず，ソーシャル・メディア上も同様の静けさが見られた。「家族以外信じない」と疑心を抱く若者もおり，政治関係の発言に注意をする様子が見られた。人民党は前回選挙同様に選挙キャンペーンへ参加することで日当（プノンペン周辺では 1 日 2 万リエル）と食事の配給

を行い，キャンペーン開始前にはその引換券を配布する様子も見られた。人民党は大型トラックを改造し，その上で音楽を流して踊る等，お祭りのような雰囲気を作りだしていたが，組織された大規模キャンペーンを除き，盛り上がりに欠けたキャンペーン期間であった。

2018 年の選挙は最大野党がいない中での選挙であり，人民党の勝利は投票前から決まっていたことであったが，その勝利を正当化するためには投票率が重要であった。そのため海外で活動を続ける救国党の活動家らは，投票に行かないようカンボジア国民に呼びかけていた。それに対して人民党は投票へ行くよう繰り返し呼びかけ，選挙当日の国営放送でも投票に行った人のコメントを流し，国民への投票圧力をかけ続けた。カンボジアは投票した証に黒インクを指に付けるのだが，このインクなしに翌日仕事へ行くことが怖いという声も聞かれた。このような投票圧力の中，無効票で対抗する人々が一定数おり，これは人民党の得票に次いで多い票数であった。

その一方で、人民党の支持が拡大したことも事実であり、取り込み戦略が奏功した一面も考えられる。増え続ける若年層人口に対する諸教育や記憶の政治は今後も強化されるだろう。さらに政治に関して自由に話しにくいという雰囲気が若年層の政治意識にどのように影響を与えるのか。これらの点も踏まえて，若年層の間で人民党支持が拡大するかどうかは引き続き注視する必要があろう。

＜付記＞

本稿での議論をもとに，2018 年度機動研究「カンボジア：最大野党不在の 2018 年総選挙」研究会の研究成果として，より詳細なものが後日公開される予定である。

＜参考文献＞

山田裕史 2013. 「変革を迫られる人民党一党支配体制（特集 1 カンボジア国家建設の 20 年）」『アジ研ワールド・トレンド』No.219（2013 年 12 月号），アジア経済研究所. http://hdl.handle.net/2344/00003557

＜著者＞

新谷春乃（しんたにはるの）。東京大学大学院博士課程。専門はカンボジア現代史。著作に「クメール共和国期（1970－75 年）における自国史の再編――体制転換後の政治と言論環境に着目して」（『東南アジア―歴史と文化―』東南アジア学会，2018 年）など。

[1] VOA (2018.07.06, https://www.voacambodia.com/a/pm-reportedly-gifted-million-of-dollars-to-working-class-voters-at-unofficial-campaign-events/4470736.html)